

## ■■■ 山と蒼空 ■■■

私の今の村居は、正面に天竜の谷をへだてて遠山の連峯を見ている。ある時は絶壁のように、またある日は段々の幕を重ねて張り廻したように、常に眼前にこの山々が立ちふさがっている。天竜の水は見えぬが、朝などその深い峪から、まっ白い霧がムクムクと上がって来る光景はまことに壮観で、ちょっと形容の出来ぬものがある。底に水が流れているからこそ、それが霧となって上がって来るのだ。

遠山の山々の一ばん正面に、一段と高く聳え立っているのは、遠江との国境線をなす熊伏の遠山である。標高は二〇〇〇メートルに及ばないから、理念的にはさして高い山ではないが、美しい山でそうして荘厳な姿をしている。横長めに右と左に峯がそそり立って、その間には幾つかの峪が切れているのだが、日によっては全く見えないことがある。紫に、黒にただの一色になってしまう。十一月のはじめの寒かった朝には、この峪に雪が来ていた、むらさきの少し赤みがかかった山肌に、うす白い雪の縞が出来て森厳さが一段と加わったように思った。そうして雪の峪々が何かしらはるかなものを思わせる。

ここから山つづきの三河の山村では、遠いはるかな極みの形容をアーレという。とおくの山などを指さして、アーレのホックドに—ここでは見えぬが、あそこに山梨の巨きな木が一株あるなどと、狩人などがよく使う。ホックドはホツのところで、山の尖端をホツという類で、謂わば極まり尽きた場所の意味である。山の村などの常に遥かな地点を見てでもいぬかぎり、ちょっと使い途のない言葉である。実はその人たちにすれば、常に遥かな地点を見ているのだが、同時にそこから—山そのものから—じっと見守られている。はっきりと自覚こそしていないが、日々の生活がそれで、これが山の人々の持つ宗教でもある。都会の穴蔵の底のような高層建築物の中などでは、到底想像も出来ない公明の世界である。

私の郷里はここからまだ二〇里も南に降った三河の山村だが、同じ山村と言うてもここにくらべると、あたりの山はまったく趣が異なっている。しかし山に見守られている点では変わるところがない。私の生まれた家というのは、今の村居と似て高い位置にあって、

西に神峯かんほうの山連を控え、南の空に舟着山という秀麗な山を見ていた。夏の夕立の後など、

その山の腰に白く水が走るのが眼に映る。あそこが舟着山の百俵窪ひゃくだわらくぼで、米が一〇〇俵とれるなどといった。白く見えるのはその田の窪を走る水である。

家の縁側から見える神峯と舟着の山を中心に、ぐるぐると山の幕で囲まれた小天地の、その北の端に、私の村一家の位置があった。ああもう神峯山に雪が来たなどと言ったものだが、春も過ぎて五月になると、この山の村は風の方向が変わって、そうして定まって来る。端午の節供を中心に昔ながらに凧揚げがはじまる。小天地のそちこちの村の凧が、狭い蒼空一杯にかかって、旺んに唸りを上げる。

五月の空一面に大小無数の凧が揚って——ちょうど今の飛行機の分列式かなどのよう——それはあの小天地を懐うのに一番ふさわしい光景である。西の内紙二〇〇枚張りの凧が、悠々としている間に、一〇枚か二〇枚張り程度の小さな凧が、ジラでも言う子供かなどのよう、小刻みに体を揺さぶって唸っている。その凧にはみんな絵が描いてあって、武者だの牡丹に獅子だの二見が浦の日の出だの、それがかすかではあるが、一つ一つ見える。そうして驚くべきことはそれらの何十何百の凧が、一つ一つ糸を引いて、誰かしらが地上で掴んでいることである。

蒼空高く揚がった無数の凧の中から、時々糸が切れて飛んでゆくのがある。糸の切れた凧のようというが、それは見てもほんに頼りない形をして、ふわりふわりと風の中を流れてゆく。見ていると淡い哀愁を感じたものである。その中で私も凧を揚げていた。父から糸枠をしっかりと掴まされて、一途に我が凧の上を見守っていたものである。その凧は母の物語で知ったのだが、私が誕生の時、後継ぎの初節句というわけで、親類や縁者からたくさんの凧が祝われた。村からは五〇〇枚張りの大凧を祝われてそれを青年衆に揚げてもらうのに、毎日おとり持ちに大骨を折ったものだという。その凧には誰が描いたか知らぬが黒一色で雲竜が描かれてあったような。そのおり祖母の里方からも一枚の凧を祝われた。一八枚張りで手頃であり、張り工合もよいというので、私が物心つくまで保存されてあった。節供を境に翌日一日糸干しをして、土蔵の二階に蔵しておく。私が揚げていたのはその凧なのだ。

贈主が絵心のある人なので、特に丹精に描いたものと言うが、どういう意図でか少し悲しい壇の浦の図であった。いずれは錦絵あたりを粉本にしたのだろうが、幼い天皇様を抱きまいらせた二位の局と、一方に巨碇を頭上に振り上げて、まさに海中の鬼になろうとする知盛の鎧姿である。その凧が風を一面に受けて、どんどん揚がって屋敷の裏の山の峯より高く上ると、この一八枚張りの凧は、マッチのペーパーくらいに小さくなる。それでも天皇様を中心にして二人の男女の白い顔が、はるかな空からはっきりと地上の私を見守っ

ていた。今思い出してもそれはたんに凧に描かれた絵ではなかったのである。

凧糸の杵を握んで、蒼空の風に見守られながら、子供心にもしやこの糸が切れたらと不安になって、にわかには細かい麻糸の縷目を見返したのも一再でなかった。その瞬間、頭脳に浮ぶ一つの気やすめは、たとえきれて飛んで行っても必ず探し出せるという心宛てであった。それは今想うとおかしいくらいだがこの小天地以外を知らぬから、そこを囲んだ蒼空の果てまでゆけばあると信じていた。しかもその果てはこの目で見ているのである。それというのが、この愚童の持つ哲学ではあたかも張子の合子のように出来ていると思込んでいる。だから糸のきれた凧は、アーレのホックドならぬあの山際の空との境まで辿りつけば、そこに仕方なく落ちて引っかかっている。そういう光景をも胸に描いていた。山の峯を喩えて、その彼方にさらに空がつづき、別の世界があろうなどとは、思いも及ばなかったのである。

今この村居に、前面の蒼空に聳えた遠山から熊伏の峯々を見ていると、ぽつつりと懸かった峯の笠の雲にも、それが山の際をこえて、さらに先にまで展けていようとは信じられない。それほど山と空と、その際がぴたりとくっついている。右手にちょっぴりと頭を出した聖岳の白い峯にしてからが、それは一種色のちがった瘤で、はるかの彼方に、さらに別の空間を隔てて聳え立っていると考える方が、まちがっていると、ともすると、そうした感懐を抱かされる。そうして山々が一段と荘厳さをもって、身に迫るものを感じる。